令和４年２月21日

東北大学全学教育　令和３年度　TOEFL ITP®テスト実施報告書

学務審議会外国語委員会英語教科部会

1.　前書きと経緯

本報告書は令和３年度（前期：5月22日(土)、5月29日(土) 後期：11月27日(土)、12月4日(土)）に実施したTOEFL ITP®テストに関する実施状況とそのスコアデータを取りまとめたものである。英語教科部会と令和４年度からの全学教育改革に呼応する英語委員会準備部会では、令和２年度から先行して実施された新カリキュラムの教育効果検証のために多面的な分析が行っている。本報告書では、主にテストスコアの推移、及び学部別の傾向に焦点を当て、TOEFL®テストの理念と評価方法を中心に据えて一般学術目的のための英語（EGAP（English for General Academic Purposes））力の涵養を教育目標として掲げる本学全学教育における英語教育の枠組みの中で、TOEF ITP®テストの果たす役割とそのスコアの分析のもたらす意味について述べるものとする。

これまで、後期（第４クォーター）で実施するTOEFL ITP®テストのスコアは、必修科目「英語B2」の授業評価の一環として反映されてきている(令和４年度からは「英語B2」に代わる「英語ⅡB」のみならず「英語ⅡA」の授業評価にも反映されることがすでに決定している)。また、令和２年度からは全学教育では初めての英語習熟度別クラス編成が実施されたが、このクラス分けのためには、令和２年度の例に倣い大学入学共通テストの英語スコアが原則的に利用された。

新型コロナウイルス感染症の蔓延が終息しないままの令和３年度において、本来型の紙媒体でのTOEFL ITP®テストを実施するために、前期・後期ともに全学部を大きく２群に分割し、なおかつ２週ずつに亘っての実施となった。

・5月22日・11月27日（対象：文・教・法・経・理・医（医・保））
・5月29日・12月4日　（対象：歯・薬・工・農）

感染症罹患、及び濃厚接触の学生にはそれぞれ然るべき間隔を置いての追試験を実施したがここではその詳細しない。

今年度のTOEFL ITP®テストスコアの分析にとって特筆すべき点は２つある。

① 昨年度（令和２年度）の前期が感染症予防の観点から４日間に亘っての完全オンライン環境での実施であったのに対して、令和３年度には前後期ともに感染症予防対策に万全を期しながら、紙媒体で実施がなされたという点。これによって、入学後間もない時期と年末を迎える時期とに受検した２回のTOEFL ITP®テストスコアの伸長等に関するより公平な分析が

可能となる。令和 3 年度の 2 回に亘る TOEFL ITP®テストの受検者は前期 2,337 名、後期 2,440 名である。

② 令和元年度までは 12 月の実施のみであったのに対して、令和 2 年度から前後期の 2 回の TOEFL ITP®テスト（前期(8 月）1,110 名、後期 2,425 名）を実施している点。このことにより、入学直後の 5 月（令和 3 年度）と前期中の 8 月（令和 2 年度)、年末の 12 月（令和 2, 3 年度）の比較が可能となる。令和 2 年度 8 月はデジタル TOEFL ITP®テストを実施しており、令和 4 年度以降は今年度とほぼ同様の 5 月・12 月の日程での実施が可能と見込まれるが、令和 2 年度と 3 年度に限っては、8・12 月と 5・12 月という 2 回ずつの組み合わせでの傾向分析が可能となる。

令和 4 年 4 月からの全学教育の全面改革に先行する形で、令和 2 年度より(1)習熟度別クラス編成、(2)新カリキュラム、(3)統一シラバス、(4) 2 冊の指定教科書の採用、を大きな柱として英語教育の改革が実施されてきた。令和 2 年度は上述のように 8 月に TOEFL ITP®テストデジタル版の（任意）受検、12 月に従来通りの紙媒体での全員受検で同テストが実施された。令和 3 年度は当初の予定通りに 5 月と 12 月の 2 回に亘って紙媒体での TOEFL ITP®テストを実施することができた。これらのデータの概観的な比較・分析が本報告書の目的である。また、得られたデータをより詳細に解析し、得られる知見を令和 4 年度以降のカリキュラムの浸透に伴う教育効果の継続的な検証に供するために高度教養教育・学生支援機構言語文化教育センターの英語教員たちが中心となって現在作業を進めており、年度内の部内報告書の取り纏めを予定している。

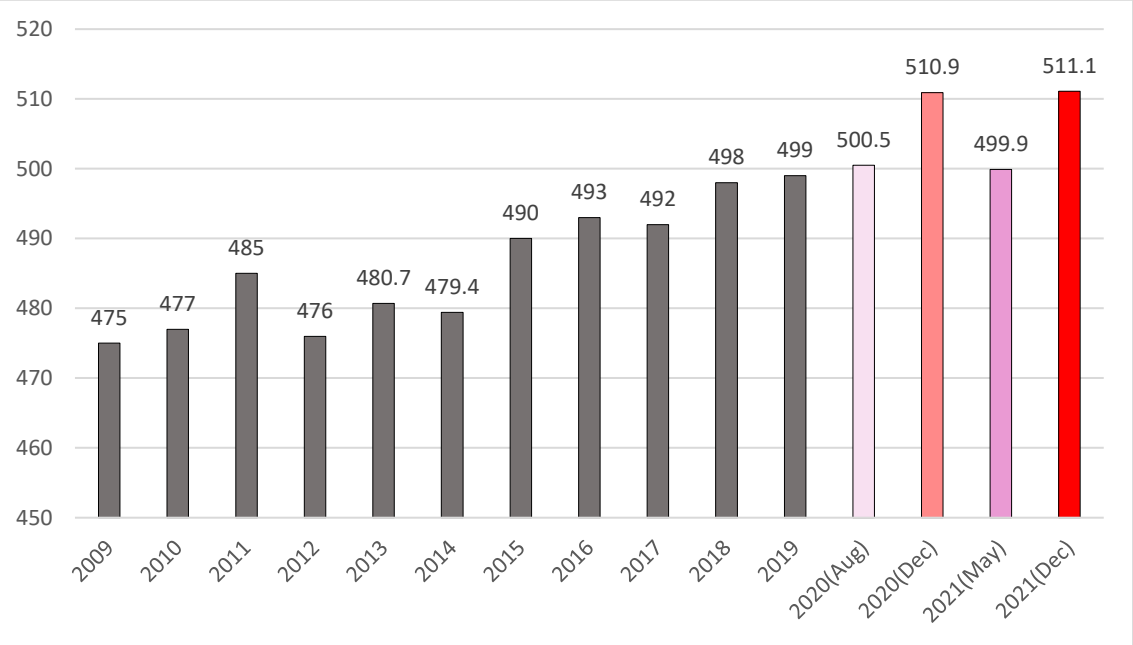
2. 「TOEFL ITP®テストスコア」の分析

2.1 全学傾向

図 1 は過去 13 年間の TOEFL ITP®テストの全学平均スコアの推移を示すものである。グラフの右側 4 本の棒は令和 2 年度と 3 年度の 2 回のテスト結果であるが、注意しなければならないのは 2020(May)の縦棒は、その他と異なって全学生受検の結果ではないという点である。

従来型の紙媒体による令和 2 年度一斉実施の 2020(Dec)の平均点と比較しても、直近の 2021(Dec)はさらに高い数値(511.1)を示している。また、令和 2 年 8 月(2020(Aug))実施の任意受検による TOEFL ITP®テストデジタル版の平均スコア(500.5)と比較しても、入学後間もない今年度 5 月(2021(May))実施の全員受検のスコア(499.9)が大きな差を示さないことにも注目すべきである。これはおそらく英語教育改革初年度でなおかつ大部分の授業がオンラインに移行を余儀なくされた令和 2 年には、4 月入学から 8 月までの期間に教員・学生間に若干の混乱があったためと推測できる。むしろ強調すべきは、今回の英語教育改革以前の令和元年(2019)年度の平均スコア(499)から見て、2 年の間に特に同条件同時期実施の 12 月のスコアでは 12 点以上の確実な伸長が示されている点である。

図 1.　TOEFL ITP®テスト全学スコア平均の推移



下の表 1.は令和 3 年度に 2 回実施された TOEFL ITP®テストの全体的スコアと Section 1 (Listening Comprehension), Section 2 (Structure and Written Expression), Section 3 (Reading Comprehension)別のスコアの推移を示すものである。Listening Section で若干のマイナス傾向が見られた理由についての多角的な分析が今後必要であるが、他 2 つのセクションでは網掛け部分のように、いずれも有意な伸びを示している。

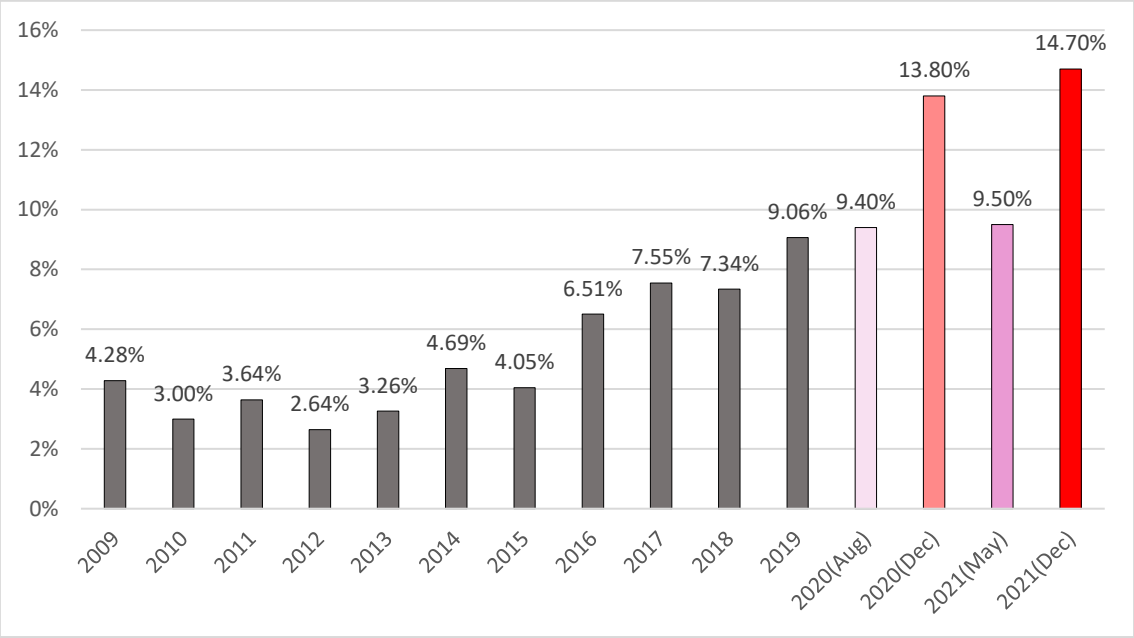
表 1.　TOEFL ITP®テスト(5 月～12 月)　全体、及びセクションごとのスコアの推移

	5 月平均(SD)	12 月平均(SD)	推移平均(SD)*	*t*-test 結果
Overall score	499.91 (38.52)	511.07 (38.78)	11.60 (23.76)	r=.8, p<.001
Listening	49.86 (4.32)	49.73 (4.42)	-.1 (.32)	r=.7, p=.14
S & W	49.44 (4.89)	52.07 (4.97)	2.69 (3.94)	r=.7, p<.001
Reading	50.67 (4.65)	51.51 (4.29)	.89 (3.97)	r=.6, p<.001

＊ 推移の数字は 5 月と 12 月の両方を受験した学生に基づく

さらに、本学の英語教育の枠組みの中で、従来から国際水準の EGAP 力の閾値と捉えている 550 点以上のスコアを獲得した学生の全受検者に対する比率を示すものが図 2 である。

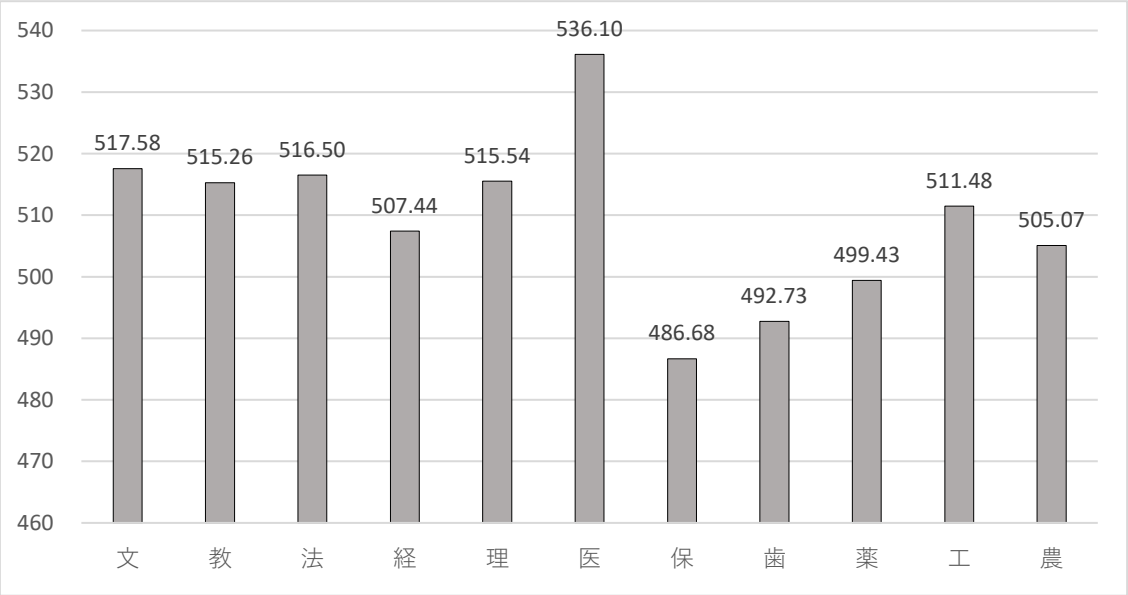
図 2.　スコア 550 以上の学生の割合



2.2 学部別傾向

図 3 は 12 月全員受検の TOEFL ITP®テストの学部（一部学科）別得点の平均である。このグラフは、各学部の受検学生数を考慮にいれない単純な平均値を示している。

図 3.　12 月実施のテスト: 学部(一部学科)別平均スコア



下の表は、2 度のテストスコアの全体、及びセクション別の推移を学部別で示したものである。

表 2. 学部(一部学科）ごとの全体、及びセクション別スコア推移

	全体スコア			Listening			S & W			Reading		
	May	Dec	Chng	May	Dec	Chng	May	Dec	Chng	May	Dec	Chng
文	503.81	517.58	13.90	50.22	50.30	0.04	49.81	52.56	2.84	51.11	52.41	1.28
教	503.92	515.26	11.15	50.68	50.74	0.10	49.81	52.45	2.56	50.68	51.38	0.70
法	508.60	516.50	8.21	50.36	50.29	-0.02	50.68	52.48	1.82	51.53	52.19	0.68
経	499.88	507.44	7.39	49.59	49.08	-0.58	49.73	51.65	1.93	50.64	51.50	0.87
理	502.37	515.54	13.50	49.70	50.20	0.54	50.12	52.40	2.29	50.89	52.06	1.22
医	534.78	536.10	5.94	52.76	52.33	0.03	53.57	54.56	1.47	54.11	53.94	0.29
保	479.25	486.68	8.06	49.03	48.24	-0.77	46.63	49.39	2.83	48.10	48.37	0.36
歯	473.69	492.73	18.94	47.18	47.90	0.66	46.78	50.63	3.96	48.14	49.27	1.06
薬	496.04	499.43	4.57	48.70	48.18	-0.46	49.04	50.94	2.10	51.07	50.71	-0.26
工	497.27	511.48	14.12	49.80	49.67	-0.15	48.94	52.30	3.37	50.44	51.47	1.02
農	495.27	505.07	11.44	49.62	49.22	-0.21	48.69	51.36	2.83	50.26	50.94	0.81

これらのデータを各セクション別にグラフ化したものが次の 3 つの図である。

図 4.　学部(一部学科)別の 5 月～12 月 Listening Comprehension セクションの平均スコア伸長

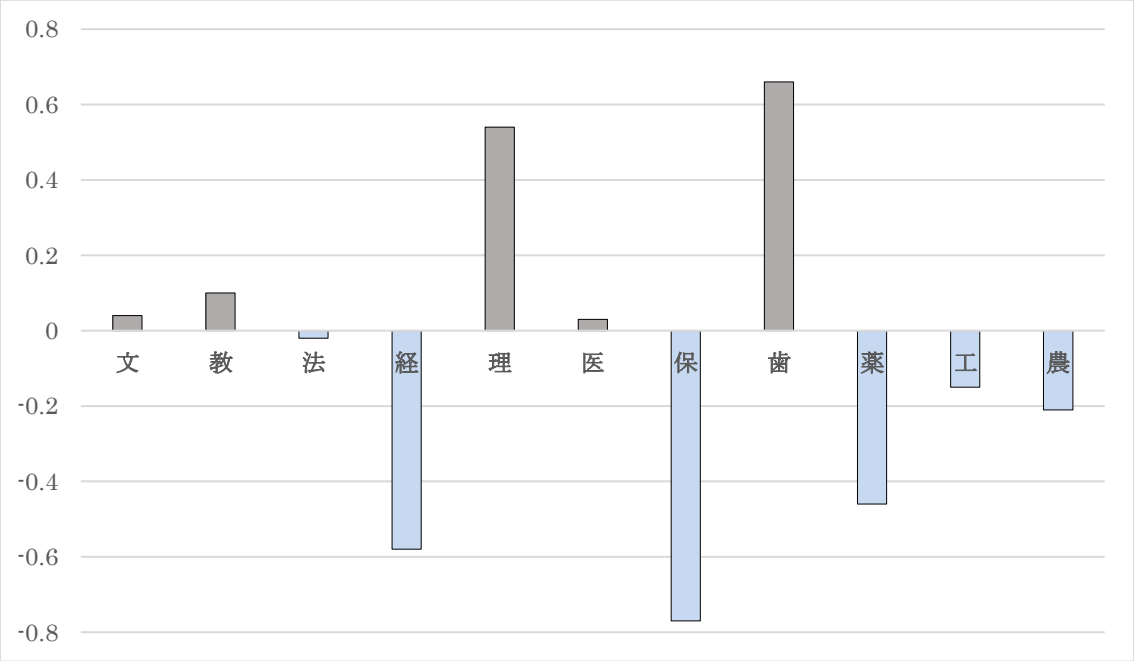


図 5.　学部(一部学科)別の 5 月～12 月 Structure & Written Expression セクションの平均スコア伸長

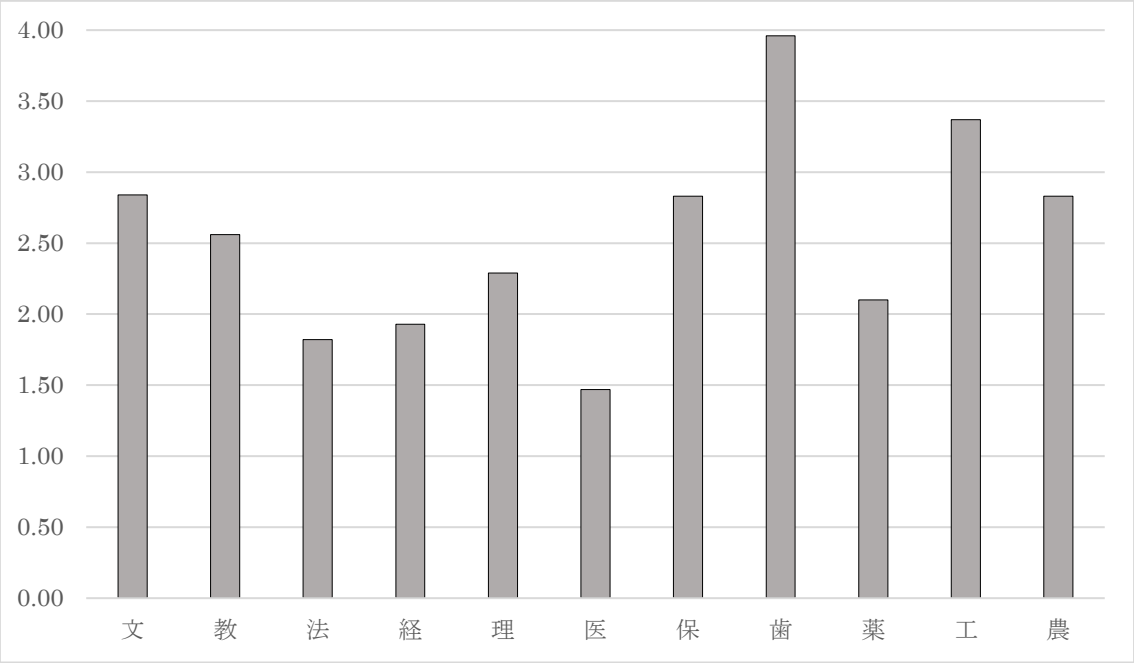
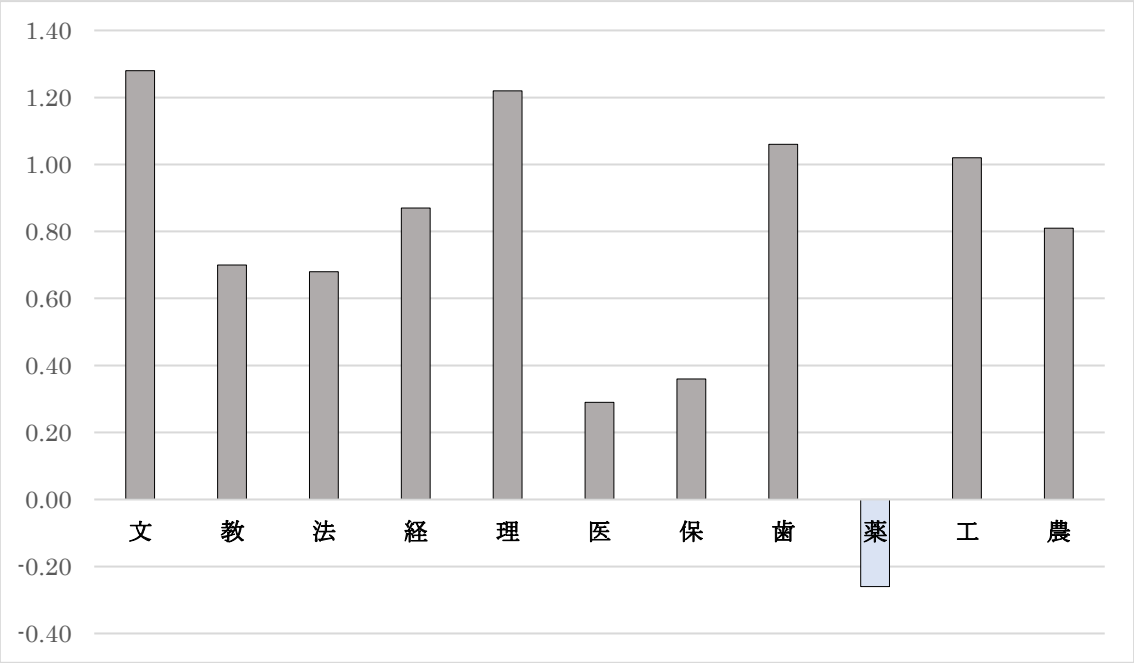


図 6.　学部(一部学科)別の 5 月～12 月 Reading Comprehension セクションの平均スコア伸長



2.3 特定層の分析

英語教科部会では、本学が学士課程での交換留学の協定を結ぶ多くの英語圏の大学が要求する TOEFL ITP®テストスコアの 550 点を閾値的な到達目標と設定している。そして、全学平均点は上

回るものの、この目標閾値に僅かに届かない 520～547 点を獲得する学生群の実力を閾値以上に引き上げることが重要な課題のひとつであり、またその向上が全学的なスコアの底上げに繋がると想定される。下の図は、後期に実施したテストの、学部(一部学科)別の 2 つのスコアゾーン別の割合を示すものである。

図 7.　12 月実施のテスト: 520-547 点・550 点以上の学部(一部学科)別学生比率

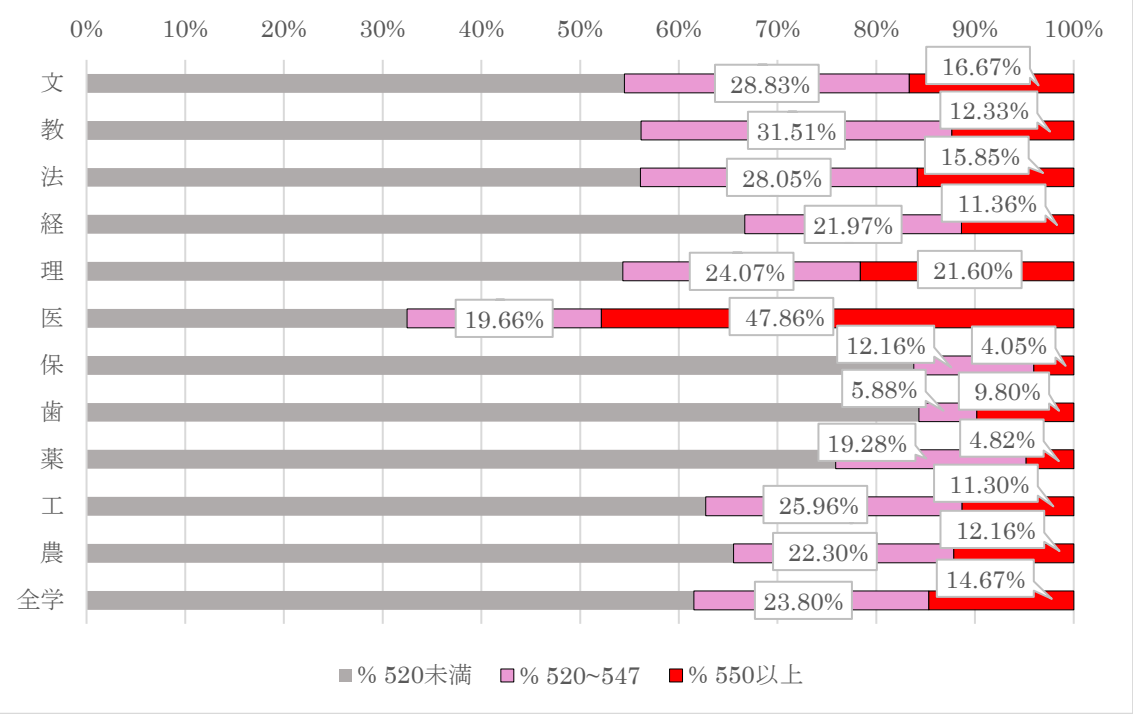


図 7.のグラフは今後のクラス編成や教材の難易度の検討にとって有益なものとなる。習熟度クラス編成等のシステムには、特定範囲の英語運用能力を備えた学生たちを適切にクラス分けすることによって効果的な教育効果を生む目的がある。

さらに前述のように、令和 2 年度は 5 月 12 月の 2 回に亘って同条件の紙媒体ベースの TOEFL ITP®テストの一斉実施が行われているために、図 8.のように 520～547 点の群と 550 点以上の群の学生割合を比較することもできる。

また、図 9.はそれぞれの学部で 550 点以上をマークした学生数の伸び率を 5 月と 12 月受検時で比較したものであり、その伸長率の平均は 5.02%である。ほとんどの学部(一部学科)で高得点者の割合は増加しており、この結果を図 3.で示した学部(一部学科)別の平均スコアと比較することからも有益な示唆が得られると考えられる。

図 8.　5 月・12 月実施のテスト:　520-547 点・550 点以上の学部(一部学科)別学生比率

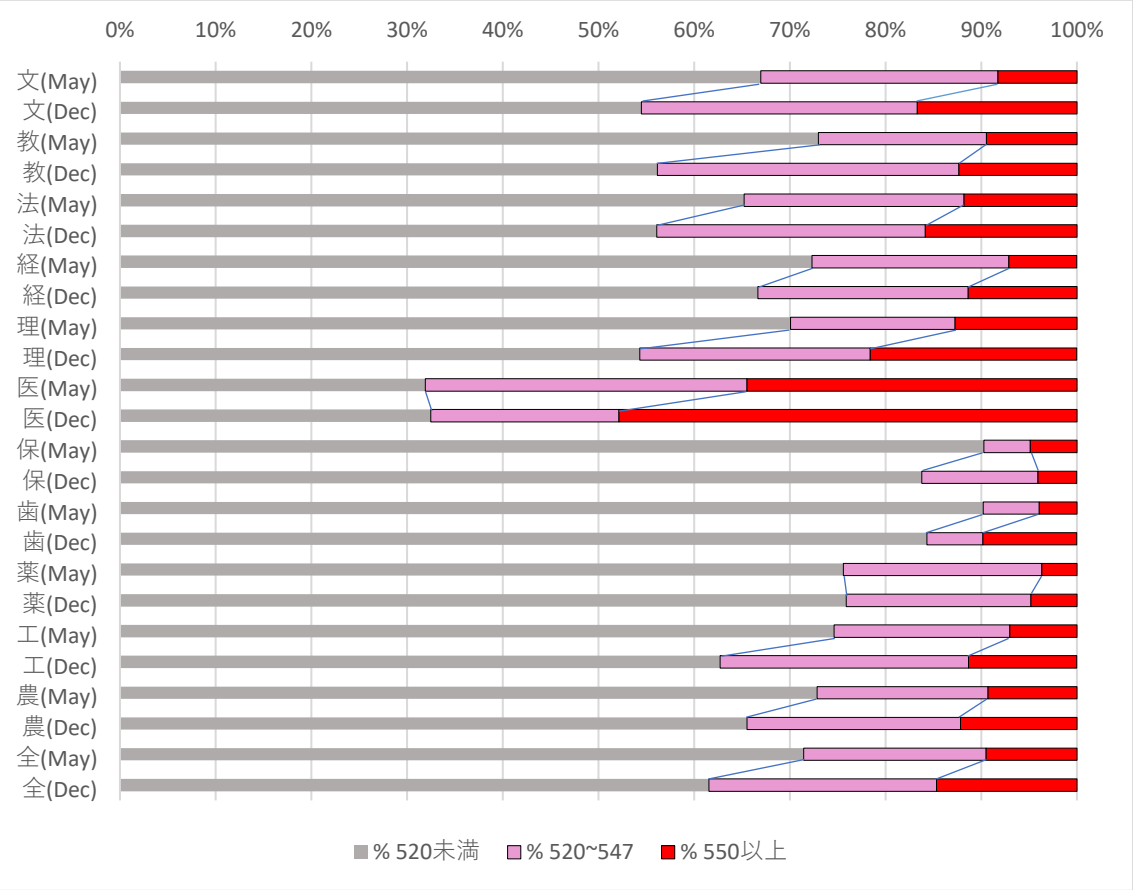
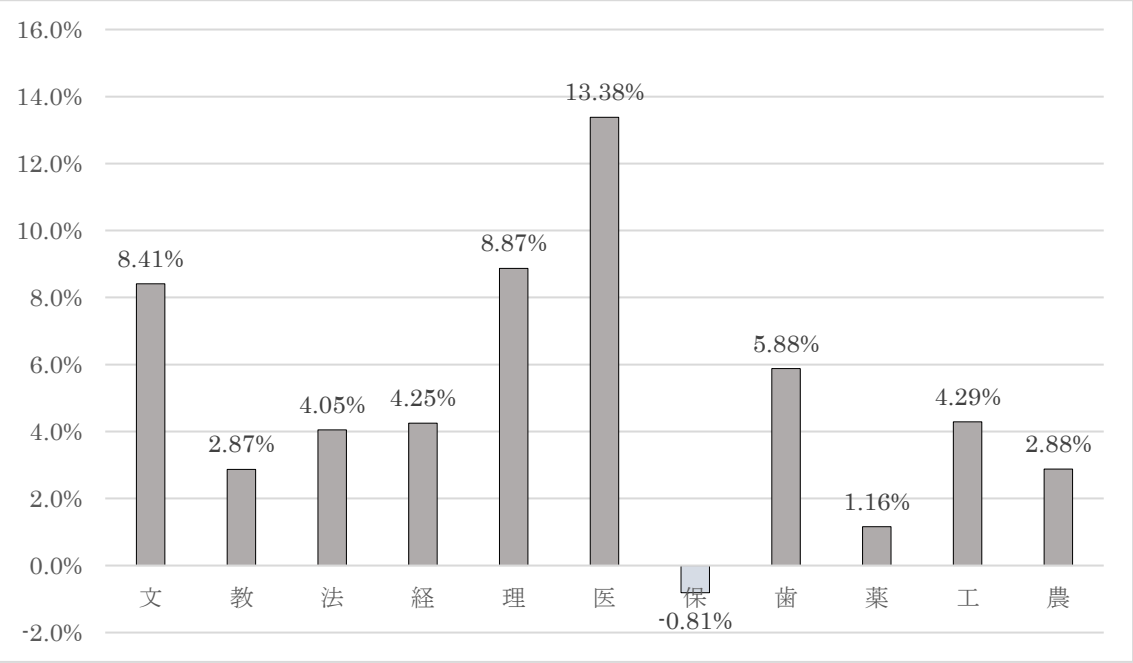
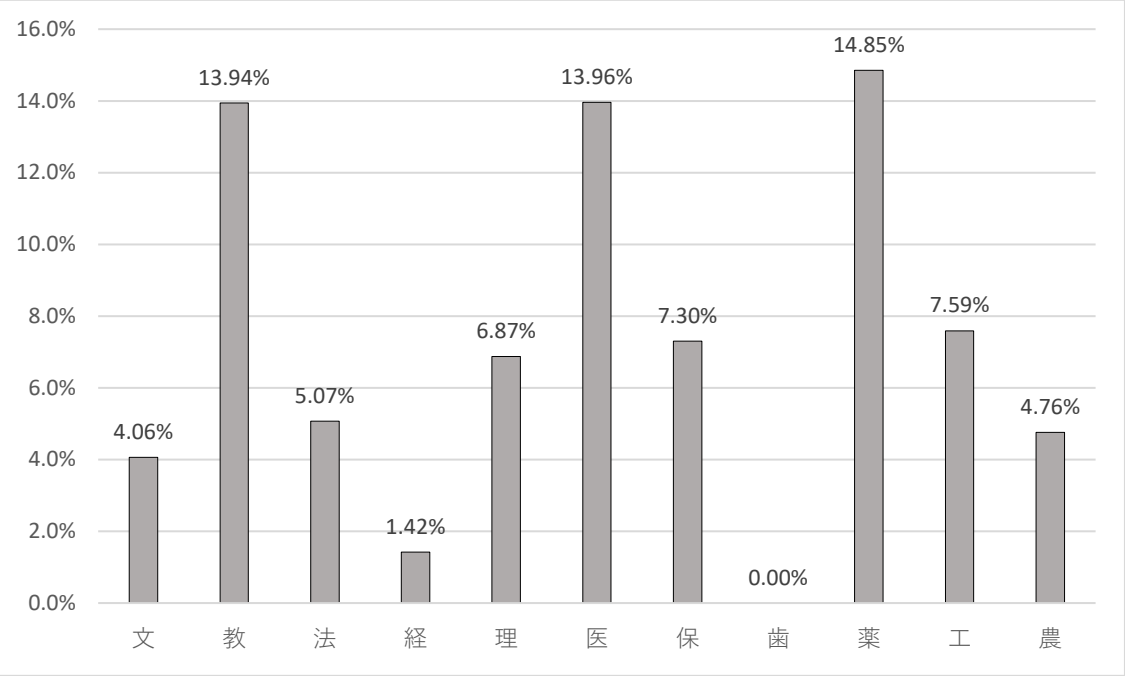


図 9.　TOEFL ITP®テスト(5 月～12 月)　550 点以上の学生比率の学部(一部学科)別増加率



一方で図10.に示すように、520点から547点までのスコアの学生数の増加率平均は7.26%である。

図 10.　TOEFL ITP®テスト(5 月～12 月)　520-547 点の学生比率の学部(一部学科)別増加率



仮にスコア 550 以上の群を成績の上位者、目標閾値に近い 520～547 点獲得者を上位予備群とみなすならば、このゾーンの増加率が比較的高いということは、新しいカリキュラムのもたらした大きな教育効果のひとつではないかと考えることもできる。また、習熟度別クラス編成基準や教材、及び補助教材の利活用方法を、特にこのようなスコアゾーンの学生の一層の学力向上のために整備・強化することが今後求められる。

また、表 2.と図 4. 5. 6.で示されるデータを検討することによって、TOEFL ITP®テストスコアとして評価される Listening Comprehension, Structure and Written Expression, Reading Comprehension の 3 技能の最適な学部別指導法が得られると考えられる。さらに、図 7. 8.で示すような学部別・ゾーン別の学習者に対しての精密なエビデンスベースの指導法が確立できれば、合計 24 個のコア・スキルを配置した独自開発教科書の内容の一層の充実に結びつくはずである。これらは英語教科から令和 4 年度から発足する英語委員会の作業グループが引き継ぐ課題である。

3.　得られた示唆と今後の方向性

令和 2 年度の TOEFL ITP®テストの前期分(8 月)は、完全にオンライン環境で 1,110 名もの大規模で実施された。この規模のオンライン受検は米国 ETS(Educational Testing Service)から正式な公表

はないが、インド、韓国等の諸外国での先行事例に比べて世界最大規模の実施実績であった。

新型コロナウイルス感染症の広がりが収束を向かえないままの令和 3 年度に 2 度に亘って従来型の紙ベースの TOEFL ITP®テストが滞りなく実施できたのは、テスト供給元の ETS Japan ならびに教育・学生支援部教務課全学教育実施係の尽力によるものである。この 2 回の実施により、本報告書で示すように入学後間もない時期から 12 月初旬というスパンの中での本学 1 年生の EGAP 運用能力の伸長が客観的に分析できたのは大きな収穫である。しかも、図 1.が示すように過去 13 年に亘るスコアの推移から、全学教育における EGAP 教育が着実な成果を上げていることは明白である。これは具体的には、(1)研究型大学として EGAP 教育を理念とした本学の英語教育改革 2 年目であること、(2)理念を実装した新しいカリキュラムが整備されたこと、(3)理念を授業実践の場で実現するために必要なコア・スキルや共通教材やシラバスが設定されたこと、に起因すると考えられる。

英語授業の多くが令和 2 年度に続きオンライン形式で提供された今年度後期に TOEFL ITP®テストのスコアが上昇したという事実は、オンライン型の授業の定着に伴い、各々の教員が提供する教育内容の平準化に加えて、授業時間帯以外の学修時間の確保や、web 上の TOEFL®関連の豊富なマテリアルへの有効な誘導が功を奏したのではないかと考えることができる。令和 5 年度からの 2 年次の英語授業では e-ラーニングの本格的な導入が予定されているために、全学教育での英語授業とオンライン環境での英語学習のベスト・マッチングに関して、詳細な分析と調査に基づいたエビデンスベースの検証と改善が不断になされるべきである。

本報告書での分析の対象となった全学部の 1 年生たちは 12 月受検の TOEFL ITP®テストのスコアに基づいて、改めて 3 つの習熟度別クラスに編成され令和 4 年度には「英語 C1, C2」の授業を受けることになる。「1 年次の英語教育の評価・検証 → 2 年次の教育改善へのフィードバック → 2 年次の評価・検証の 1 年次の教育改善への反映」という検証サイクルが、今後も然るべき間隔をおいての複数回の TOEFL ITP®テストの一斉実施によって確立されることが期待される。

また、Speaking 能力測定を組み込んだ新しい TOEFL ITP®テストが間もなくリリースされるのに伴って、そのテストを評価尺度に取り入れた新しい教育カリキュラムに基づく授業は、Writing 能力も射程に入れた 4 技能評価型の TOEFL iBT®テスト等での評価対象となる EAP(English for Academic Purposes)能力育成という目標に確実に繋がると期待される。入学からの 1 年半の期間で着実な EGAP の運用能力を涵養し、世界水準の EAP 能力の獲得という研究型大学としての本学の英語教育の最終目標を達成するための基盤的な能力を育成することが、全学教育における英語教育の果たす重大な役割であると考えられる。

参考資料

『東北大学全学教育　令和 2 年度前期　TOEFL ITP®テストデジタル版 実施報告書』　令和 2 年 9 月 12 日　国際文化研究科　岡田毅・CIEE 国際教育推進部　小菅洋史

『東北大学全学教育　令和 2 年度　TOEFL ITP®テスト実施報告書』　令和 3 年 2 月 10 日　学務審議会外国語委員会英語教育改革実施ワーキンググループ、学務審議会外国語委員会英語教科部会

（文責： 高度教養教育・学生支援機構　岡田毅）